

化度寺塔銘に就いて

神田喜一郎

*Shirayama
Shirayama
Vol. 2, 149
March 11,
5日*

歐陽詢の手書になつた碑銘は、鄭樵の金石略にも二十三種を擧げてゐるが、其數固り尠くはない。然るに古來特に有名になつてゐるのは九成宮醴泉銘と化度寺塔銘とである。この二銘は共に森嚴な正楷をもつて書かれ、遺憾なく歐陽詢の本領を發揮してゐるので、趙子固は之を以て楷法第一と激賞したとのことである。清朝の王澐は書法に精しきを以て名ある者であるが、其の虛舟題跋卷三に次の如く言つてゐる。

醴泉銘化度寺碑。皆率更晚歲合作。醴泉明暢。化度適逸。正如東俗西華。不可軒輊。評者曰化度勝醴泉。非篤論也。
又言ふ

本編卷四十三に、此の化度寺塔銘を載せ、其の條下に解縉の春雨集を引いてゐるが、それに次の如く見てゐる。

河南范諤隆典初跋尾云。慶曆初。其高王父開府公諱雍。舉使關右。歷南山佛寺。見斷石砌下。視之廼此碑。稱嘆以爲至寶。既而寺僧誤以爲石中有寶。破石求之。不得。棄之寺後。公他日再至。失石所在。問之僧以實對。公求得之。爲三斷矣。乃以數十緹易之以歸。置里第賜書閣下。靖康之亂。諸父取藏之井中。兵後好事者出之。椎搗數十本。已乃碎其石。恐流散浙右者皆是物也。

この話に就いて王澐は虛舟題跋卷三に
此蓋石歸范後。范氏子孫以石破碎已甚。從爲之辭。以長其光價耳。寺僧雖甚貪痴。決不至此。と言つてゐるが、何れにしても化度寺塔銘の原石が宋代以來既に破碎してゐたことは確である。從つて今日此銘の完全な拓本といふものは一も傳は

化度寺塔銘に就いて

自趙子固以率更化度醴泉爲楷法第一。於是率更楷跡。聲價遠出虞褚上。自姜堯章以化度勝醴泉。於是化度聲價又出醴泉上。究竟化度雖精緊而體方用圓。與醴泉同。特以是小楷故更爲可貴。即ち王澐は醴泉化度の二銘を以て互に軒輊すべからずといふ議論なのであるが、既に其の言へる如く、古來化度を以て醴泉に勝るとする論者が寧ろ多く、楊守敬は激素飛青閣平碑記に於て、化度寺塔銘の條下に
余細按是碑。奇橫險峭之中。仍自豐腴悅澤。溫文爾雅。其下筆直如漢鑄銅印。昔人且有謂在醴泉以上者以此。と稱してゐる。今この二銘の優劣は兎に角として、其の如何に書法上珍重すべきものであるかは、大體以上の品評によつても解らう。然るに此の化度寺塔銘の原石は夙に亡佚して、今日では之が原拓本を見ることは殆ど不可能事らしい。金石

つてゐない。そこで梁章鉞の如きは「居今日而舉化度寺碑。不必再言原石本。但得見宋拓宋翻者。即希世之寶也。」とさへ言ひ、更に宋拓本として、陳彥廉本、王孟揚本、王介州第一本、同第二本、吳門鮑氏本、玉泓館顧氏本の六本があり、宋翻本として、墨池堂本、橫石本、薛元超本、重翻黃石本、重翻薛元超本、陝西本の六本があるけれども、これらの諸本とても、皆盡く眞に宋拓宋翻のものであるか否か頗る怪しいとのことを述べてゐる。退庵金石書 翻跋卷四 然し此の諸本の中で、玉泓館顧氏本といつてゐるのは、後に吳荷崖の藏となり、更に成親王の手に歸したもので、眞に范氏原石の拓本とせられてゐるが、これが比較的信用し得るものらしい。楊守敬は望堂金石初集に別に范氏書樓原本と題する化度寺塔銘を收めてゐるが、其本は楊守敬の跋語に據ると、玉泓館顧氏本に比して四十字少いけれども、それは顧氏本よりも後拓であ

Reliefs of the stone

る爲であつて、實は同種のものであるとのことである。顧氏本は近年支那で石印に附せられたらしいが、私は未だ見てゐない。楊守敬の學書邇言によると、「歐書之極醇古者、以化度寺爲最熾赫。原石久佚。在宋時已多翻本。翁覃溪得一本。題識近萬字。實亦宋翻。惟吳荷屋所得范書樓藏本。是原石。後歸成親王。滬上有石印。近亦希見矣。」とあるから、其の石印本も一寸直ぐには手に入りさうにもない。従つて私は望堂金石初集の范氏書樓原本といふのが、果して楊守敬の言ふ如く顧氏本と同種のものであるか否かを能く決せないし、又顧氏本なるものも眞に范氏原石本として如何程信用し得るかを言明し得ないけれども、姑らく楊守敬の言ふ所を信するならば、今日に於て最も確なのは望堂金石本でなければならぬのである。然るに近年になつて、ベリオ、スタイン兩氏が各々支那の敦煌地方より唐代の拓本と思はれる化度寺塔

銘を發掘して歐洲に將來した。其本は二本合せて僅に全銘の約四分の一より存せないが、現在の化度寺塔銘拓本では最古のものであることが疑なく、既に其の影印本も支那で出版せられ、非常に金石學者の注意を惹いた。所が此のベリオ、スタイン兩氏將來のものと思堂金石本とを比較すると、可なり書法が相違して居り、その爲か楊守敬などは學書邇言に「若敦煌石室殘本。亦重刻也。」と貶したが、私は却て此の敦煌本こそ、歐陽詢の眞面目に尤も近いものと思ふのである。それで要するに、眞に化度寺塔銘の書風を窺ふには、此の敦煌本を以て満足するより他はなく、望堂金石初集のものでも、實は原拓であるか否か随分疑へば疑ひ得るものなることを知るのである。

扱て以上は主として化度寺塔銘の傳來に就いて述べたのであるが、一體此の塔銘は如何なる性質のものであるか、それに就いては餘り前人之を

論じたものが見當らない。故に王昶は金石萃編卷四十三に此の塔銘の全文を載せ、更に自ら考證を附して、「諸家跋語。但盛稱率更書法之精妙。而於建塔立碑原委。未暇詳及。故節取其文以備考證。」と言つてゐる。實際化度寺塔銘を論じた者は古來無數にあるが、一言なりとも建塔立碑の原委に及んだものは蓋し王昶を以て嚆矢とすべきであらう。然るに元來金石萃編に載せてゐる化度寺塔銘の本文は、極めて粗末な剪裁によつたものと見ね、殆ど句讀し得ないまで誤謬脱漏がある。而して其の試みた折角の考證も疏漏で殆ど何等人を益す所の無いのは遺憾と云はねばならぬ。此の點に就いて羅叔言先生は夙に深甚の注意を拂はれ、其の金石萃編校字記の中に、萃編に載する化度寺塔銘の本文を尠からず訂正せられ、又其の讀碑小箋の中には、萃編の考證の誤謬を指摘せられた。今私は姑らく萃編の考證と羅先生の讀碑小箋に於ける

指摘を根據にして、多少化度寺塔銘の原委を明らかにしたいと思ふのである。猶萃編に載する此の塔銘の本文に就いては、嘗て我が濱田青陵博士も、敦煌本と望堂金石本によつて訂正せられたことがあつた。東洋學報八卷第一號

此の化度寺塔銘は詳しくは「化度寺故僧慈禪師舍利塔銘」といふのである。僧慈禪師とは如何なる人であるかといふに、金石萃編には次の如く考證してゐる。

按文云師俗姓郭氏。蔡伯喈云號卽郭也。曾祖號叔。乃□□咨。郭泰則溫文儒雅云云。所指號叔疑卽左傳所稱。又號卽古郭氏。己見高誘戰國策注。所指郭泰。疑卽後漢之郭林宗。則碑稱曾祖者。乃是始祖之謂。故下云聖賢遺烈。奕業其昌。此下云。祖憲父韶。方是慈之祖父。此郭憲官荆州刺史。與後漢之郭憲別一人也。碑稱慈師齒胃上庠。博覽群書。則是身列文學者。下云依山稠

禪師授受禪法。是其受度之師。

此の考證に對して讀碑小箋には何等言及する所が無いが、元來僧誌禪師の傳は、道宣の續高僧傳卷二十三に立派に見えてゐるのである。其他義楚六帖卷十一や六學僧傳卷十四にも僧誌禪師の事蹟を見出すことが出来る。それで萃編の此條の考證は誤謬ではないが、續高僧傳の本傳などを見逸したのは確に粗漏の譏を免れない。而して萃編の編者はその見逸した結果として、前文の直ぐ後に次の如く間違つた考證を試みてゐるのである。即ち

下云開皇時有魏州信行禪師。又云禪師被勅徵□
□。乃相違奉。其月廿二日奉送信行禪師。□
靈塔。又云式昭景行。乃述綿邈。詳玩文義。此
碑似爲隋時魏州信行禪師建塔立碑。非即誌禪師
塔銘也。特不知其月廿二日者。係屬何年。文多
脫游。無從詳釋。神理希□以下。皆係銘辭。亦
多參錯。後題貞觀五年十一月十六日建。當是誌

禪師爲信行禪師建塔之年也。

とある。第一此の塔銘には確に「化度寺故僧誌禪師舍利塔銘」と題してあるのに、之を僧誌禪師が信行禪師の爲めに建てた塔の銘であるとは、常識から云つても不合理である。續高僧傳の僧誌禪師の本傳によると、僧誌は貞觀五年十一月十六日に化度寺に於て遷化した。其月の二十二日に靈魄を終南山に奉じ、門徒等は舍利を收めて、僧誌が豫てから親密にしてゐた信行禪師の塔の左に僧誌の塔を建てたとある。而して更に「左庶子李伯藥製文、率更令歐陽詢書。文筆新華。多增傳本。故累誼野外矣。」とあるのを見れば、それが所謂化度寺塔銘であることは固り秋毫も疑がない。而してこのことは羅叔言先生も亦全く別な根據によつて萃編の考證の誤まれるを訂正せられた。即ち讀碑小箋に

化度寺誌禪師塔銘。開皇時有魏州信行禪師。又

云其月二十二日奉送信行禪師。□□靈塔。又云式昭景行。乃述綿邈。予案陝西通志。百塔寺本唐僧信行塔院。信行僧傳。志誤。大歷二年間。慕信行者。皆定於信行塔之左右。考唐僧陪信行塔者。有海禪師。其塔銘均及信行。誌師亦陪定信行塔。故碑有式昭景行語。金石萃編云。碑似爲信行禪師建塔立碑。非即誌禪師塔銘。疏甚。

とある。是れ洵に其言の通りであつて、能く續高僧傳の記事とも符合する。意ふに所謂信行禪師とはいふまでもなく六朝の末に、彼の淨影寺慧遠や天台大師智顛や、將た又嘉祥大師吉藏など、相並んで出た傑僧であつて、その首倡した三階佛法の教義により、支那佛教史上に、特別な位置を占めてゐる者である。信行の傳は續高僧傳卷二十に見えてゐる。尤も三階佛法は當時の佛教界からは異端邪説として排斥せられ、禪師の亡くなつた隋の開皇十四年を距ること僅に六年にして、勅令を以て之が流布を禁斷せら

れた。其後唐代になつても屢々三階佛法の流布を禁せられたが、其の屢々禁斷せられたいけ、當時にあつては廣く信奉せられたので、大唐內典錄卷五にも、三階佛法のことを述べた所に、「開皇二十年勅斷不聽行。想同箴勅。然其屬流廣海陸高之。」とあり、又開元釋教錄にも「開皇二十年。有勅禁斷。不聽傳行。而其徒既衆。蔓延彌廣。同習相黨。朋援繁多。」と言つてある。さればその結果、信行禪師を葬つた長安の南終南山鷄鳴の阜には、信行の信徒が多く陪葬せられ、遂には其處に百塔寺の名さへ起るに至つたものらしい。羅叔言先生は前に引く如く、「考唐僧陪葬信行塔者。有海禪師。其塔銘均及信行。誌師亦陪定信行塔。」と言つてゐるが、信行に陪葬せられたのは、海禪師と僧誌禪師とのみではない。續高僧傳卷二十二の西京慈門道場釋本濟傳によると、信行の高足たる本濟も、その示寂するや、弟子の道訓道樹の二人によ

つて、遺骨が終南山の下に葬られ、そこに塔を建て銘を立て、其の徳が表はされたことである。又本濟の弟の善智も、信行に深く服膺してゐた者であつたが、其の卒するや、弟子等は遺骨を信行の墓の右に附葬したとのことである。而して斯かる陪葬者は勿論幾百人もあつたこと、思はれるのである。然し今日猶それら陪葬者の中で塔銘の傳はつてゐるものは、畢沅の關中金石記や毛鳳枝の關中金石文字存逸考によつて調べると、羅先生の擧げられた海禪師塔銘の他には、

光明寺大德僧慧了法師塔銘 顯慶二年二月

道安禪師塔記 總章三年二月

澤王府主簿梁寺并夫人唐氏墓誌銘 垂拱四年

淨域寺法藏禪師塔銘 開元四年五月

の數種があるばかりである。而して化度寺塔銘も亦當にその一であるべきことは前に述ぶる所に據つて略明かであらう。

意ふに三階佛法は支那佛教史上特別な一宗派として大に研究せられねばならぬものであるが、今日では其の教義も歴史も共に資料の闕佚の爲めに、一向手が下されてゐない様子である。然るに斯く唐代の石刻に意外な資料があつて、多少なりとも續高僧傳の記事など、比較尋釋して互證し得るのは幸甚である。私が今此の化度寺塔銘に就いて知る所を述べたのも、これが單に書法の上からのみではなく、支那佛教史の資料として一面大に注意せられねばならぬことを證するに在つたのである。若し此の化度寺塔銘の内容に更に深い研究を加へるが如きは、別に世の佛教史家に之を委ねておかう。

梁漱溟著「東西文化及其哲學」

岡崎 文夫

會國藩李鴻章等が大規模に西洋の科學技術を採用した當時、未だ文化問題として東西の區別を認めて居なかつたのであるが、爾來西方文化の勢、政治社會方面に漸次其壓力を及ぼし來たり、遂には西方の學術思想を以て支那の學術思想を改變せんとする梁任公林宗孟等の新學會さへ顯出するに至つた。畢竟西方文化は東方文化を根柢より倒壊し了るであらう乎。

抑文化とは何ぞ。文化とは一民族の生活の様法である。生活とは不盡の意欲、一民族には必一生活様法がある。これ最初本因の意欲が各異れる方面に分出するによりて異なる文化が発生するのである。

今西洋文化の特に著しき特長は(一)自然を征服せし事(二)科學的精神(三)デモクラシーとする。

元來支那にては有權者と無權者とは全く兩途であつて、有權者は無限に權力を有するに對し無權者は無限に權力を有せないのである。然るに西洋にては公衆のことは人々總てこれに參與して自ら主となり、反之個人的事に關しては人々過問の權がない。西洋のかゝる思想を人類社會變動の上に解釋すれば、社會を組織する分子より見て個性の伸展とすべく、分子の組織の上から見て社會性の發達とすべきであるが、この事は支那には全然缺けて居る。其理由は西洋人は社會道德即公德を重んずるに反し、支那人は公德に就ては殆んど顧みない。たゞ人と人との道德即私徳が非常に重視せられて居るのである。彼にありては個人對社會問題として家庭、社會、國家、世界問題が論議せらるゝのであるが、此に於てはむしろ君臣、父子、